BOOK IX — 自由の代償

第04章 — 確保命令

01 — 署名のないページ

デレン大尉の説明資料の最後のページは、午前六時、別の封筒に入れられて届いた。マーラ・ヴェン将軍が国防事務局に戻るまで、送付が保留されていたのだ。その時点で、説明会への出席を許されなかったいくつかの政府部門にも、すでに電子版が届いていた。

ヴェンは二人の立会人の前で承認文書を読んだ。うち一人は民間部門の局長だった。

作戦は、国家の連続性に関する条項を法的根拠とするものになっていた。ロイ・バッティがハヴェルを殺害した際、それが正当防衛であったかどうかを軍が立証する必要はなかった。刑事裁判で有罪判決が下されている必要もなかった。政府の管理外で生き続けることが国家安全保障上の脅威と認定された、製造された人間を回収する権限が与えられていた。

「回収」とヴェンは言った。「その言葉を選んだのですね」

「検査を行う可能性を残すためです」

局長は補足指令も持参していた。回収が困難になった場合には、軍は対象を抹殺し、残存する生体材料を確保することを許可されていた。

ヴェンは法律顧問に向き直った。

「独立憲章は、この権限を認めているのですか？」

「事務局の見解では、国家の連続性に関する条項が優先されます。おそらく評議会は異議を唱えるでしょう」

「おそらく？」

「まだ通知されていません」

窓の向こうに、施設の外灯を交換している保守作業員の姿が見えた。男は日の出前から働きに来ていた。眼下の街には、たった今、新たに一つの機関が人の命を奪う権利を与えられたことを示すものなど何もなかった。

彼女は、作戦を単一の軍指揮系統の下に置くことを条件とした。民間の研究機関の職員が現場の人員に直接指示を出すことは許されない。彼女自身が変更を承認しない限り、対象の生命を維持することが最優先の目的であり続ける。

局長は条件を受け入れた。それによって指令の根幹が変わるわけではなかった。

六時十七分、ヴェンは署名した。

副官が二通の文書を受け取り、階下へ向かった。これでデレンの資料にあった署名のないページを差し替えることができる。

02 — 診察の予約

ロイは夜の大半を眠れずに過ごした。同じ姿勢を長く続けると、負傷した肩に鈍い痛みが生じた。椅子の上で姿勢を変え、痛みが和らぐのを待つ。その頃には、先ほどよりも眠れそうになくなっていた。

朝食の席で、レイチェルは端末に届いた政府の通知を彼に見せた。北部行政地区での診察に出頭するよう求めるものだった。元大臣の死亡に伴って負った傷の評価が目的と記されていた。

通知には時刻が指定されていたが、別の日を希望するための手続きはなかった。付き添いなしで来るようにも指示されていた。

「イマニが手配したものじゃないわ」とレイチェルは言った。

ロイは住所を確認した。診察の場所は、彼らが調べていたあの医療別棟だった。

「ハヴェルが私に何をしたのか、見たいのかもしれない」

「それなら、あなたの担当医に聞けばいいわ」

彼は端末を返した。ガラス面に映る通りの向こうのレストランでは、朝の客を迎えるため、椅子が外へ運び出されていた。前の晩、彼とレイチェルはそこで食事をした。

配送業者が病院の中庭に入り、警備員に呼び止められた。二人は短い言葉を交わした。配送業者は荷物を台車に載せ、建物の中へ入っていった。

レイチェルは法律相談室に電話した。法務担当者は、診察の通知を発行する根拠となった権限を示す文書の写しを入手するまで、返答しないよう求めた。

ロイは、強制的な検査を招待だと説明されたのはいつが最後だったか、思い出そうとした。ある部屋の記憶があった。装置の下に横たわる人々ではなく、装置自体のために室温が低く保たれていた部屋。苦痛は一時的なものだと告げる声も覚えていた。

だが、自分が生きてきたと記憶している年月の、どこにその部屋が位置するのかは分からなかった。

レイチェルはテーブルの上で彼の手のそばに自分の手を置いた。

「これが何なのか分かるまでは、何も決めなくていいのよ」

二人が話している間に、二通目の通知が届いた。移送の手配が済んだことを知らせるものだった。

ロイは一度も診察に同意していなかった。

03 — 二つ目の指示

デレンは輸送ホールに隣接する部屋で、灰色のコートを着た三人の人員を見つけた。彼らには装備が支給され、改訂された指令を読む時間も与えられていた。再現された街路での演習に参加した男は窓のそばに立ち、整備士が車両を点検する様子を眺めていた。

デレンは、彼らの権限がもはや評価の範囲にとどまらないことを理解しているかと尋ねた。

残りの二人のうち一人が答えた。

「任務上の位置づけが変更されたことは理解しています」

彼らの勤務記録には、短縮された識別符号が記載されていた。現場での連絡にはその符号で十分だとデレンは言われていた。医療部門からは、三人とも実戦投入が可能な状態にあるとの保証も受けていた。

その保証には、彼らが何年勤務してきたのかについて、何も記されていなかった。

彼は部隊の軍曹、エリン・サトウを紹介した。首都の外で初めて任務に就いたときから、彼の部隊に所属していた女性だった。彼女は三人に一人ずつ挨拶した。窓のそばの男は、ほかの二人より一瞬遅れて挨拶を返した。

デレンは、民間の医療施設が診療を続けていることを説明した。病棟には患者がいて、職員は建物の間を行き来し、軍が来た理由を理解しているとは限らない見舞客もいる。民間人が指示を理解できなかったとしても、それを敵意の証拠と見なしてはならない。

演習に参加した男が質問した。

「指定された対象が招待を断った場合、その拒否は抵抗に当たりますか？」

「当たらない」

「立ち去った場合は？」

「立ち去ったと報告する。その先の判断をここでするのではない」

男はその答えについて考えた。

「補足指令では抹殺が許可されています」

「まだ満たされていない条件の下でだ」とデレンは答えた。「承認の内容が変われば、命令が出る」

彼は自分の兵士たちをよく知っていた。切迫した状況で誰が指示の確認を求め、誰が質問を終える前に行動を起こすかも知っていた。だが目の前の三人が、指示の矛盾をどのように解釈するかは分からなかった。

サトウは窓のそばの男に、何と呼べばいいか尋ねた。

男は軍での識別符号を答えた。

彼女はその符号を繰り返し、それから別の名前はあるのかと尋ねた。

デレンは初めて、軍事機密とは何の関係もない理由で、質問に答えが返ってこないのを見た。

04 — 拒否する権利

午前九時半、病院の法務担当者に最初の公式回答が届いた。診察は国防事務局が承認した確保手続きの一環であると記されていた。同局は付随する作戦文書の開示を拒んだ。

彼女は印刷した回答をイマニの執務室へ持っていった。

「異議を申し立てます。ただ、いつ審理が行われるかは保証できません」

イマニは「確保」という言葉を二度読んだ。

「彼が人間であることは分かっているはずです。憲章も読んでいるのに」

「この作戦には憲章が適用されないというのが、彼らの主張です」

レイチェルが入り、その後ろからロイが続いた。法務担当者は、命令の即時停止を求めるつもりだと説明した。そしてロイに、軍の施設で検査を受けることに同意するかと尋ねた。

「いいえ」

彼女はその答えを書き留めた。

「では、それを評議会に提出します」

それから三十分、四人は文書を一つずつ検討した。やり取りの中には、予定されている検査の内容も、拘束期間も、ロイが解放される条件も明記されていなかった。イマニが治療について相談できる担当医の名前すらなかった。

レイチェルは、軍が研究資料の保管庫も接収するつもりなのかと尋ねた。

法務担当者は、別個の移管命令を見つけていなかった。資料には従来の制限が引き続き適用されていた。

廊下から車椅子がドア枠にぶつかる音が聞こえた。イマニは看護師を手伝いに出ていき、少しして戻ってきた。その後も話はたびたび中断された。建物のどこかでは女性が出産し、別の部屋では技術者が故障したモニターを修理しようとしていた。

ロイは何度も夜を過ごしながら、政府との最後の対決がどのようなものになるかを考えてきた。兵士たち、暗い街路、そして力には力で応じられる機会を思い描いていた。

自分が判断を誤れば逃げることのできない人々が大勢いる病院など、想像したことはなかった。

「ここにはいられない」と彼は言った。

レイチェルは彼を見た。

「まだよ」と彼女は答えた。「外で何が起きているのかを知らなくては」

彼はもう少し待つことに同意した。法務担当者は審理の請求を提出した。

05 — 街の変化

午前も遅くなる頃には、岡京のいくつかの行政庁舎に国防事務局の車両が現れていた。市の公式発表では、ハヴェルの死を受けた治安体制の一時的な見直しと説明されていた。

変化が最もはっきりと現れたのは、身分記録が不完全な人々の生活だった。鉄道駅では、回復した身元の認定を受けるのに三か月を費やした男が、発行されたばかりの移動許可証に追加の確認手続きが必要だと知った。東部市場の近くでは、ある女性が、十二年間住み続けた住所はもう有効な記録と一致しないと言われた。

例外となる事例は個別に審査されることになっていた。駅では誰も、審査にどれほど時間がかかるか見当をつけられなかった。

レイチェルは病院職員からのメッセージで、手続きの遅延について知った。それがロイの件に直接関係しているのかは分からなかった。彼女はEDENに、公開されている通知を保存し、確認された変更と未確認の報告を区別するよう求めた。

エイドリアン・タイレルは、その発表が届いたとき研究室にいた。前日の午後に交換用のセンサーを受け取っていたが、もう一つの部品は、購入権限の確認が済むまで引き渡しが保留されていた。

彼はレイチェルにメッセージを見せた。

「解決まで何日もかかるかもしれない」

「今の観察を続けることはできる？」

「ああ。だが、次の一連の試験は始められない」

二人は、装置がそろっていない作業に着手するよりも、残りの観察を記録することにした。実験を急いだ代償は、待つことの不便よりも長く残るだろう。

ロイはエイドリアンが部品を保護用の包装に戻すのを見ていた。

「この部屋にすらいないんだな」と彼は言った。

エイドリアンは顔を上げた。

「誰が？」

「私たちを止めている連中だ」

研究室の窓は一枚も割れていなかった。装置も無傷だった。職員はまだ自由に入室できた。それでも、街のどこかで下された決定が、すでにこの部屋で可能なことを変えていた。

ロイはハヴェルの刃の先へと伝わった力を思い出した。その力が自分を打つまで、彼には見えなかった。

これは、また別の種類の力だった。

06 — 訪問者

正午を少し過ぎた頃、最初の軍用車両が病院の敷地に入った。デレン大尉は灰色のコートの三人を連れずにやって来た。同行していたのはサトウ軍曹と、封印された確保命令の写しを携えた政府の連絡官だった。

イマニは受付で彼らを迎えた。患者と話をしに来たのか、それとも患者を連れ出しに来たのかと尋ねた。

連絡官は、軍にはロイ・バッティを拘束する権限が与えられていると述べた。移送の手配を申し出て、受け入れ先の機関には医療を提供する設備があると説明した。

イマニは担当医の名前を求めた。

連絡官は文書を参照するよう促した。

「この文書には名前がありません」

デレンはロイと直接話ができるかと尋ねた。イマニは、本人の同意が必要だと答えた。

ロイが現れると、大尉はコートの下に装着された固定具に気づいた。説明資料の写真に写る男は、目に見える支障もなく歩いていた。目の前の人物は左右どちらかに体重を偏らせて立ち、右腕を身体に寄せていた。

「バッティさん」とデレンは言った。「あなたに同行し、北部の医療別棟へお連れするよう指示を受けています」

「診察の予約だと聞いていましたが」

「承認された権限の内容が明確になりました」

「私が望むときに、その別棟から出ることはできますか？」

デレンは、解放の条件は所管当局が決定する、と答えることもできた。説明会で用意されていたのは、そういう答えだった。

「それは約束できません」と、代わりに彼は言った。

ロイは首を横に振った。

「ならば、行きません」

連絡官が口を開きかけたが、デレンは手を上げて制した。拒否したことが軍司令部に報告されると理解しているか、ロイに確認した。

ロイは理解していると答えた。

サトウは受付の近くで待つ人々を見ていた。ロイに気づいた者もいたが、彼に近づく者はいなかった。酸素チューブをつけた男の隣に座っている子供が、大尉の軍靴を見つめていた。

デレンは兵士たちに建物へ入るよう命じなかった。連絡官には、任意の協力を得るための最初の試みは終了したと告げた。

彼はロイと握手を交わさずに去った。手を差し出すことが礼儀なのか、それとも自分自身の気まずさを和らげるための行為なのか、彼には分からなかった。

07 — 待つことの代償

評議会の緊急審理は午後四時に予定されていた。二時二十分、法務担当者のもとに、政府が評議会の管轄権を争うとの通知が届いた。審理を行うことはできるが、国防事務局は、暫定的な裁定が自局の人員を拘束する効力を持つとは認めないという。

彼女はすぐにレイチェルに電話した。

レイチェルが病室に行くと、ロイは病院に持ってきたわずかな私物をまとめていた。替えのシャツを鞄に入れ、包帯を一巻き収める場所を作るため、また取り出した。

「審理は予定どおり行われるわ」と彼女は言った。

「分かっている」

「命令への異議申し立ても取り下げられていないわ」

「それも分かっている」

肩にかけるベルトを固定するには、手助けが必要だった。レイチェルが鞄を支え、彼がベルトを調節した。終わるまでに、彼の手は二度止まった。

「たくさんは持てないわね」と彼女は言った。

「なら、持たなければいい」

軍の計画を最初に知ったとき、彼は逃げることに同意しなかった。政府が製造した人々に会い、彼らに何がなされたのかを知りたかったのだ。今も答えを求めていた。だが病院にとどまることは、その出会いがいつ、どこで起きるかを軍に決めさせることを意味していた。

レイチェルは自分も一緒に行くと告げた。二人は、病院を出る前に何をしなければならないか話し合った。研究グループが合法的に資料の管理を続けられるようにする必要があった。ロイの傷が悪化したとき、イマニがどこに連絡すればいいのかも知らせておかなくてはならない。患者の誰にも、自分たちの居場所を隠したり、代わりに兵士を欺いたりするよう頼むべきではなかった。

それらすべての責任を両立させる方法はなかった。

隣の廊下を通ったセナが、ロイから借りた本を返しに立ち寄った。彼の鞄に気づき、退院するのかと尋ねた。

「ここを出るんだ」とロイは答えた。

「同じことなの？」

彼はレイチェルを見た。この午後の出来事をすべて説明せずに答える方法を、二人とも見つけられなかった。

セナは彼に本を渡した。

「持っていていいよ」とロイは言った。

彼女は本を持って立ち去った。廊下が再び静かになるまで、ロイには彼女の足音が聞こえていた。

08 — 作戦の移行

ヴェン将軍は、暫定憲章に対する政府の対応についての説明会に出席しているとき、デレンの報告を受け取った。彼女が法律顧問との話を終える前に、民間部門の局長が報告書に目を通した。

「彼は合法的な指示を拒否しました」

ヴェンは局長から文書を受け取った。

「将校への同行を拒否しただけです。負傷者は一人も出ていません」

「施設を離れれば、管理された状況で回収する機会は失われます」

局長は補足指令の発動を求めた。ヴェンは抹殺権限の付与を拒否したが、任意の回収から強制的な確保への移行を承認した。デレンには合同部隊の指揮を執るよう命じた。

この作戦で初めて、機密指定された三人の人員に、ロイに対して直接行動する権限が与えられた。

デレンは病院の外側の中庭で命令を受け取った。彼は何の意見も添えず、サトウに読み上げた。演習に参加した灰色のコートの男が輸送車から降り、二人のそばで待った。残りの二人は車内にとどまった。

一瞬、彼らは互いの顔ではなく、皆が病院を見ていた。入口の近くの壁には、子供たちが描いた絵があった。赤い屋根の家々の上、黄色い空を青い鳥が横切っていた。コンクリートの表面を雨水が伝う部分では、塗料が剥がれ始めていた。

建物の中では、レイチェルが診療棟の近くでロイを待っていた。看護師が軍が戻ってきたことを二人に告げた。ロイは鞄を置き、固定具を外した。負傷した腕は身体に寄せたままだった。

「やめて」とレイチェルは言った。

彼は入口の方を見た。ガラス越しに大尉の姿が見え、その数歩後ろに一人の男が立っていた。灰色のコートを着た男だった。

二人の視線が合った。

ロイは、戦うために造られた者たちの中に、あのような静けさを見たことがあった。だが見知らぬ男の身体の均衡には、説明のつかない何かがあった。男がデレンの後を追って向きを変えたとき、その動きに先立つ予備動作は何も見えなかった。

ロイは男が一歩踏み出すのを見た。

二人の間の距離が、突然、実際よりもずっと短く感じられた。

第04章 終。